

I 極東地域研究センター・2012 年度の活動

極東地域研究センターは研究主体のセンターであることから、毎年シンポジウムの開催や国際会議への出席、書籍や報告書の出版をしています。これまでに決まっている本年度の研究活動は以下の通りです。

- 4月：慶熙大学（韓国）主催の「環東海の地域研究に関する国際会議」に出席・発表
- 8月：北東アジア学術交流ネットワーク（NAAN）にて発表（於：韓国・江原大学）
「東アジア『共生』は可能か～南北朝鮮、中台関係の将来～」を原書房より出版
- 9月：仁荷大学・ERINA・極東地域研究センター・3機関合同会議
トロムソ大学（ノルウェー）のエリザベス・クーパー准教授による「北極域の植物と生態系」に関する講演（於：富山）
- 10月：「北東アジアの地域研究について」（於：富山）（北東アジア学会との共催）
- 12月：「北東アジア地域の森林資源と森林政策」に関するシンポジウム開催
ロシア国立極東農業大学の研究者と極東地域研究センターによる「ロシア極東の森林と木材産業」に関するセミナー（於：富山）
（文責：今村）

II シンポジウム「中ロ国境地域：共生への期待と不安」参加記

2012年3月16日、富山大学で「中ロ国境地域：共生への期待と不安」と題してシンポジウムが開催された。同大学極東地域研究センター堀江典生教授が主催したもので、中ロ共生の将来的展望を種々の分野の現状把握を通して追及する目的で開催された。取り上げられた分野は、中ロの農業、林業、物流業、極東ロシア地域開発などである。最も印象に残ったのは、発表者の殆どが挙げた中ロ関係や中ロ国境地域の発展の障害としてのロシア人の「中国脅威論」である。中国で駐在員実務経験をした者としては、俄かには信じることができない話であった。もし、これが共生への不安材料となっているのであれば、中ロ関係研究の発展のためには、この視点や意味を捕えなおす必要があると感じた。

現在、人口約6000万人のミャンマーの貿易は増大し、企業が急激に進出している。ミャンマーにも「中国脅威論」はあるが、ミャンマーの経済発展の障害とは言えない。何が違うのか。中ロ関係

研究はそこに光を当てる必要があるのではない。経済発展が人の意識を変えるとよく言われる。中ロ国境地域の人口はミャンマーとそれ程違いはない。中ロ関係研究の新展開を期待したい。

（日本海事センター 福山秀夫）

III 研究紹介 (5) -経済研究班・金 奉吉-

私は「東アジアを中心とした貿易・直接投資自由化と経済協力」と「韓国を中心とする新興工業国における部品・素材など中間財産業と経済発展との関係」という2つのテーマを中心に、理論的・実証的研究を行っています。

世界各国は、グローバル化とリージョナリゼーションの流れが同時並行的に進行している中で、急変する通商環境への多角的な対応策を模索しています。東アジアにおいても、2000年代に入ってからFTA/EPAのような制度的な地域経済圏の形成の動きが加速化しています。一方、これまで韓国や中国などに比べFTA政策で遅れていた日本は、2011年11月にAPECホノルル・サミットにおいて環太平洋経済連携協定（TPP）交渉への参加を表明し、東アジアだけでなくアジア太平洋地域における経済統合の動きに一石を投じました。

私の研究では、まず、日中韓を中心とした北東アジア地域における事実上（デファクト）の経済統合の実態とそれを規定する要因について、国際貿易・国際分業、直接投資、サプライチェーンなどの状況に対する分析を通じて明らかにし、次に、最近の経済統合と関連した動き、制度的経済統合の必然性とそのための条件について検証することを主な目的としています。

二番目の研究テーマに関しては、部品・素材産業の特性を明らかにするとともに、産業構造高度化パターンと国際競争力構造について、日本と韓国の比較分析を行っています。さらに、それを踏まえて、韓国だけでなく中国やインドのような新興工業国についても研究を進めています。新興工業国では、産業構造の高度化と経済発展を進めていく過程で、部品・素材産業が最終財産業と強い相互依存性及び相互因果性を持っており、これらの中間財産業と最終財産業の連関関係が脆弱な場合、「低成長（低技術）の罠（underdevelopment trap）」に陥る可能性が高いという指摘があります。

私の研究の目的は、この指摘のように、最終財産業の発展にも関わらず、新興工業国における部品・素材産業の発展の遅れが産業構造高度化にどのような経路で影響を与えるのかを明らかにすること、そして新興工業国が産業構造高度化（経済

発展)を進めていく過程で低成長の罠に陥ることなく離陸 (take-off) できるために必要な、中間産業の育成と関連した政策的含意とは何かを導き出すことです。

私は長年これらの研究テーマに関連する分野を専門としてきました。そして、得られた研究成果を踏まえて、日本や中国、韓国の研究機関及び研究者と共同研究を実施しており、今後はこの研究ネットワークを一層拡大していきたいと思っています。

(文責：金)

IV 英国便り : Being at “Far West” (3)

山本雅資

先日、英国ミッドランド地域にあるラフバラ大学で開催された Smart Energy City Conference UK and Japan に出席してきました。持続可能な都市のエネルギー利用をどのように達成していくかということが共通テーマでした。東日本大震災後のエネルギー供給のあり方についての発表もあり、英国側の参加者も大変興味をもって参加していたことが印象的でした。同時に多くの日本企業が世界各国で Smart city のビジネスに進出していることを知り、大変刺激を受けました。



写真1. 近くの公園にて (3月末の18時ごろ撮影：山本)

英国滞在も8ヶ月となりましたが、生活面では日本社会の効率性をあらためて実感する良い機会となりました。自動販売機で釣り銭が出ないことには慣れましたし、商品が出ない可能性もあることも覚悟して買うようになりました。鉄道が日本の感覚で時間どおりには来ないことはもちろんのこと、旅行の当日に指定席を買うことはできないし、変更することもできません。自分の指定席に誰かが座っていれば交渉する必要があるかもしれませんが、電車そのものが突然キャンセルになるリスクも覚悟していた方がよいということも学びました。公共料金は必ずしもメーターを確認せずに料金が徴収され、(幸い今のところ私は未経験ですが) 時には何倍もの料金が請求されたりするので、よく確認し、必要があれば粘り強い交渉が必要なようです。店員はレジで待ってい

る客に気がついても同僚とのチャットが終わるまでは来ませんし、終わっても小走りであることは期待できません。今は日本に戻り全てが効率的に進む毎日が待ち遠しいですが、(円高の影響もあり) 日本のモノ・サービスがはるかに高いことを考えると、英国生活で感じたストレスも懐かしく思い出すかもしれません。横柄な店員の態度はともかく、英国のカントリーサイドのシンプルながら優雅な風景は間違いなく日本に帰っても印象深く思い出すであろうと感じています。

(文責：山本)

V 地域研究四方山話 (4) スコピエにて

2012年2月に欧州の小国マケドニアの首都スコピエに降り立った。「なんってたって失業率36%! 失業者が至るところに座り込んでいるわ。気をつけてね。」研究仲間のスロバキアのマルチナが、私を送り出すときにくれた歓送の言葉である。のんびりとマケドニア広場を歩く。歩きながら UNDP の現地スタッフであるスネザナは笑った。「平穩なものですよ。実質的な失業率はおそらく16から18%。みんな灰色経済でなんとかやっているのよ。」

空港では、ドイツ便カウンターに長蛇の列ができる。出稼ぎにでる男たちや家族でいっぱいだ。それ以外の行き先と時間帯は閑散とした空港である。在外マケドニア人の母国への送金もマケドニア経済を支える重要な源泉だ。



写真2. スコピエの地ビール (撮影：堀江)

スコピエのアイリッシュバーに転がり込む。羽振りのいいマケドニア人が酔っている。「俺はね、スウェーデンに住んでいるんだ。ちょっとしたビジネスで成功してね、いまじゃデトロイト郊外のトロイってところにも家がある。さあ、飲もう。この一杯はお前へのおごりだ! ここには家もある。仲間もいる。ここに帰ってくると、やっぱりここは故郷だと実感するんだ。」そりゃそうだ。私も仕事終えて早く家に帰ろうと思った。

(文責：堀江)